

雨夜の怪談

岡本綺堂

青空文庫

秋……殊ことに雨などが漕そう々降ると、人は兎角とかくに陰気になつて、
 動やもすれば魔物臭い話が出る。さればこそ、七偏人しちへんじんは百物語を
 催ほして大愚大人を脅かさんと巧み、和合人わごうじんの土場六先生はツ
 ーフラ（註：オランダ渡来の、ラツパのような形状をした呼筒。
 半七捕物帳「ズウフラ怪談」に詳しい。）を以て和次さん等を驚
 かさんと企つるに至るのだ。聞く所に扱よれば近来も怪談大流行、
 到る所に百物語式の会合があると云ふ。で、私も流行を趁おうて、
 自分が見聞の怪談二三を紹介する。但し何れも実録であるから、
 芝居や講釈の様に物凄いのは無い。それは前以てお断り申して置
 く。

一

明治六七年度の頃、わたしうち私の家は高輪たかなわから飯田町いいたまちに移つた。飯田町の家は大久保何某なにがしといふ旗本はたもとの古屋敷で随分広い。移つてから一二月ほど経つた或夜の事、私の母が夜半よなかに起きて便所に行く。途中は長い廊下、真闇まつくらの中で何やら摺違すれちがつたやうな物の氣息けはいがする、之と同時これに何とは無しに後へ引戻されるやうな心地がした。けれども、別に意にも介とめず、用を済すまして寢床へ歸つた。こゝに住むこと約半年、更さらに同町内の他へ移転した。すると、出入でいりの酒商さかやが来て、旧宅にゐる間に何か變つた事は無かつたかと

問ふ。いや、何事も無かつたと答へると、実は彼の家は昔から有名な化物屋敷、あなた方が住んでお在の時に、そんな事を申上げては却つて悪いと、今日まで差控えて居りましたと云ふ。併し此方では何等の不思議を見た事無し、強て心当りを探り出せば、前に記した一件のみ。これでも怪談の部であらうか。

二

安政の末年、一人の若武士が品川から高輪の海端を通る。夜は四つ過ぎ、他に人通りは無い。芝の田町の方から人のやうな火が宙を迷うて来る。それが漸次に近くと、女の背

に負はれた三歳ばかりの小供が、竹の柄を付けた白張のぶら提
ようちん 燈 を持つてゐるのだ。唯是だけの事ならば別に仔細無し、こゝ
に不思議なるは其の女の顔で、眼も鼻も無い所謂のツペらぼう。
武士も驚いて、思はず刀に手を掛けたが、待て暫し、広い世の
中には病氣又は怪我の為に不思議な顔を有つ女が無いとも限らぬ、
迂闊に手を下すのも短慮だと、少時づつと見てゐる中に、女は消
ゆるが如くに行き過ぎて遠く残るは提灯の影ばかり。是果して人
か怪か竟に分らぬ。其の武士と云ふのは私の父である。
忠盛は油坊主を捕へた。私も引捕へて詮議すれば可かつた
ものを……と、老後の悔み話。

慶応けいおうの初年しよねん、私の叔父おじは富津ふつつの台場だいばを固めてゐた、で、或あるひ
日の事。同僚吉田何某なにがしと共に近所へ酒を飲みに行つた。帰途かえりみち、
冬の日も暮れかゝる田甫路たんほみちをぶらゝくと、吉田は何故なぜか知
らず、動ややもすれば田たの方へ踉蹌よろけて行く。勿論幾分か酔つては
るが、足下あしもとの危い程でも無いに兎角とかくに左の方へと行きたがる。
おい、田へ落ちるぞ、確乎しつかりしろと、叔父は幾たびか注意しても、
本人は夢の様、無意識に田の中なかへ行かうとする。
其そのうち中に、叔父が不図ふと見ると、田を隔へだてたる左手ゆんでの丘に一匹の
狐がゐて、宛さながまねら招くが如くに手を挙あげてゐる。こん畜生さむら！ 武

士を化さうなどと、は怪しからぬと、叔父も酒の勢ひ、腰なる刀をひらりと抜く。これを見て狐は逃げた。吉田は眼を摩りながら「あゝ、睡かつた……。」それから後は何事も無い。

動物電気に依て一種のヒプノヂズム式作用を起すものと見える。狐が人を化すと云ふのも嘘では無いらしい。

四

鼬の立つのは珍しくはないが私は猫の立つて歩くのを見た。

時は明治三十一年の八月十二日、夜の一時頃であらう。私は寝苦しいので蚊帳を出た。庭を一巡して扱それから表へ出やうと、

何心なく門を明けると、門から往来へ出る路次ろじの真中まんなかに何物か
 立つてゐる。月は明るい。其そのうしろ姿は正まさしく猫、加之しかも表通り
 の焼芋商やきいもやに飼つてある雉子猫きじねこだ。彼奴きやつ、どうするかと息を潜ひそめ
 て窺うかがつてゐると、彼は長かれき尾を地に曳ひき二本の後脚あとあしを以もつて轟然すつく
 と立つたまゝ、宛さなら人のやうに歩んで行く、足下あしもとは中々なかなか確たしかだ。
 はて、不思議と見てゐる中に、彼は既すでに二間けんばかりも歩き出し
 た。私は一種の好奇心に駆られて、背後うしろから其後そのあとを尾つけやうと、
 登音あしおとを偷ぬすんで一步踏ふみ出すや否や、彼は忽たちまち顧みかつた。と思ふと、
 平常へいぜいの四脚よつあしに復かえつて飛鳥ひちようの如ごとくに往来へ逃げ去つた。私も
 続いて逐おうたが、もう影も見せぬ。

翌日、焼芋屋の店を窺うかがふと彼は例の如く竈前かままえに遊んでゐる。

併し^{しか}昨夜の事を迂闊^{うつかし}饒舌^{しゃべ}つて、家内の者を鬧^{さわ}すのも悪いと思つたから、私は何にも言はなかつた。が、其後も絶えず彼の挙動に注目してゐると、翌月の末頃から彼は姿を現はさぬ。同家に就^つて訊けば、猫は二三日前から行方不明となつたと云ふ。

動物学上から云へば、猫の立つて歩くのも或^{ある}は当然の事かも知れぬ。併し^{しか}我々俗人は之^{これ}をも不思議の一つに数^{かぞ}へるのが慣例^{ならい}だ。

五

明治^{にじゅうさん}廿三年の二月、父と共に信州軽井沢^{やど}に宿^{やど}る。昨日から降積^{ふりつ}む雪で外へは出られぬ。日の暮れる頃に獺^{かりうど}夫^{うど}が来て、鹿の

肉を買つて呉れと云ふ。退屈の折柄、彼を炉辺に呼び入れて、
種々の話をする。

木曾路の山へ分け入ると、折々に不思議を見る。獵夫仲間では
これをえてものと云ふ。現に此の獵夫も七八年前二三人の同業者と
連れ立つて、木曾の山奥へ獵に行つた。斯る深山へ登る時には、
四五日分の米の他に鍋釜をも携へて行くのが慣例。

登山してから三日目の夕刻、一同は唯ある大樹の下に屯して
夕飯を焚く。で、もう好い頃と一人が釜の蓋を明けると、濛
々と颯る湯気の白き中から、真蒼な人間の首がぬツと出た。

あツと驚いて再び蓋をすると、其中で物馴れた一人が「えてもの
だ、鉄砲を撃て。」と云ふ。一同直に鉄砲を把つて、何処を的と

も無しなに二三ぼつ発ぱつ。それから更さらに釜の蓋を明けると今度は何の不思議なもない。

えてものの正体は何なんだか知らぬが、処おり々に斯こういふ悪戯いたずらを
すると、獵夫の話。

六

白露戦争の際、私は東京とうきょう日々新聞社から通信員として戦地へ派遣された。三十七年の九月、遼陽りょうようより北一里半りはんの大紙房うといふ村とまに宿つて、滞留約半月はんつき。其間そのあいだに村人の話を聞くと、大紙房と小紙房との村境むらぎかいに一間の空家あきやがあつて十数年

来誰たれも住まぬ。それは『鬼き』が祟たたりを作なす為だと云ふ。

支那の怪物ばけもの……私は例の好奇心に促されて、一夜を彼の空屋に送るべく決心した。で、更さらに委くわしく其その『鬼き』の有様を質ただすと、曰いわく、半夜に凄風颯せいふうさつとして至る。大鬼だいきは衣冠いかんにして騎馬、小鬼しょうき数十何れも劍戟けんげきを携たずへて従ふ。屋に進んで大鬼先まづ瞋いかつて呼ぶ、小鬼それに応じて口より火を噴き、光こうえん屋を照すと。何の事だ。宛まるで子不語しふごが今古奇観こんきかんにでも有ありさうな怪談だ。余り馬鹿々々しいので、探険の勇氣も頓とみに失うせた。

七

これは最近の話。今年の五月、菊五郎一座が水戸へ乗込んだ時。一座の鼻升、菊太郎、市勝等五名は下市の某旅店（名は憚つて記さぬ）に泊つて、下座敷の六畳の間に陣取る。で、第一日の夜、市勝が俯向いて手紙を書いてみると、鼻の頭の障子が自然にすうと明いた。之を序開きとして種々の不思議がある。段々詮議すると、これは此家に年古く住む鼬の仕業だと云ふ。

併し人間に對して害は加へぬと分つたので、一同も先づ安心。其後は芝居から帰ると、毎夜彼の鼬を對手にして遊ぶ。就中面白いのは、例の狐狗狸式に物を当てさせる事で、例へば此室に女が居るかと問ひ、居ない時には彼が廊下をとんと一つ打つ。

居る時にはとん／＼と二つ打つと云ふ類だ。

或時、此室に手拭が幾筋掛けてあるかと問へば、彼は

廊下を四つ打つた。けれども、手拭は三筋より無い。更に聞直し

ても矢はり四つだと答へる。で、念の為に手拭を検めると、三筋

と思つたのは此方の過失で、一つの釘に二筋の手拭が重ねて掛

けて有つて、都合四筋といふのが成ほど本当だ。是には何れも敬

服したと云ふ。が、彼は果して鼬か狸か、或は人の悪戯かと種

々に穿索したが、遂に其正体を見出し得なかつた。宿の者は

飽までも鼬と信じてゐるらしいとの事。

青空文庫情報

底本：「近代異妖篇 —— 岡本綺堂読物集三」 中公文庫、中央公
論新社

2013（平成25）年4月25日初版発行

底本の親本：「木太刀」

1909（明治42）年10月号

初出：「木太刀」

1909（明治42）年10月号

※「……」と「……………」の混在は、底本通りです。

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は

小書きしました。

※表題は底本では、「雨夜《あまよ》の怪談」となっています。

入力：江村秀之

校正：noriko saito

2019年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雨夜の怪談

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>